（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　島村　久幸

島村久幸氏の論文「ロック『人間知性論』における諸観念と知識について」は、近世認識論の祖と目される 17 世紀イギリスの哲学者ジョン・ロックの哲学的主著『人間知性論』に焦点を合わせ、そこでの最重要基本語である「観念」の意義と、「観念」に基づいて分析される「知識」のありようについて、オーソドックスな哲学史研究の視点から論じた研究である。全体として、第 1 部で「観念」一般に関する問題を論じ、第 2 部で『人間知性論』における、単純観念、一次／二次性質の区分、実在的本質と唯名的本質をめぐる「実体」理解、論証道徳、といったロック哲学固有のトピックを順に取り上げ、丁寧にその意義を見定めていき、そして第 3 部で知識と（知識未満の）信念との対比について論じて、結論部でロック経験論の意義についてまとめる、という構成になっている。

まず第 1 部で、島村氏は、「観念」には「感覚」と「内省」という二つの起源があることを確認した上で、これまであまり注目されてこなかった「内省の観念」の重要性を浮かび上がらせる。「内省の観念」には知覚、推理、判断といった思考活動そのものが含まれており、実は「感覚の観念」を知覚によって獲得する場合にも「内省の観念」が同時に関与せざるをえない構造がある、と島村氏は論じ及ぶ。こうした理解に基づいて、ロックの「観念」説を「知覚の因果説」的に解釈する見方が斥けられる。そして第 2 部で、第 1 部の整理を承ける形で、いよいよロックの「観念」説の細部が論じられる。まず「単純観念」、とりわけ一次性質／二次性質という区分に現れる「単純観念」のあり方をどう捉えるか、という問いが立てられる。島村氏はここで、マッキー、アレクサンダー、キャンベルといったロック研究の先駆者たちの議論を検討しながら、一次／二次性質の区分が、実は常識の誤りを科学的知見に即して正すという目的で提起されたと指摘するに至る。また、道徳は数学のように論証できるとする、いわゆる「論証道徳」の主張が検討され、島村氏は、ロックの真意は、道徳的な論争場面では概念の定義を探究していくべきだ、とする点にあったという独自の理解を提起する。さらに、本質論が取り上げられ、ロックの本質論が古代的な実体形相論への強い批判に動機づけられており、「唯名的本質」というロックの押さえ方は現代にまで通じる斬新な切り口であったことが指摘される。そして最後に第 3 部において島村氏は、『人間知性論』第 4 巻の（狭い意味での）知識論を取り上げ、科学的知識そして技術は知識未満の信念の体系であることを喝破した上で、信仰や啓示についてもロックがきわめて首尾一貫して自身の知識論のスキームを適用していたことを指摘する。かくして島村氏は、ロックが「経験」に基づいて認識論を展開したことの眼目を、私たちの知識や信念の体系がダイナミックに変容していくという事態への眼差しの中に見届け、ユニークかつ野心的なロック論を結論づける。

生得概念批判や人格同一性問題といった、ロック哲学の基幹を構成する問題系への掘り下げがやや物足りない点があるが、丁寧なテキスト解読と詳細なサーヴェイに基づいた手堅い、しかし同時に野心的な研究であり、博士（文学）の学位に値すると判断する。